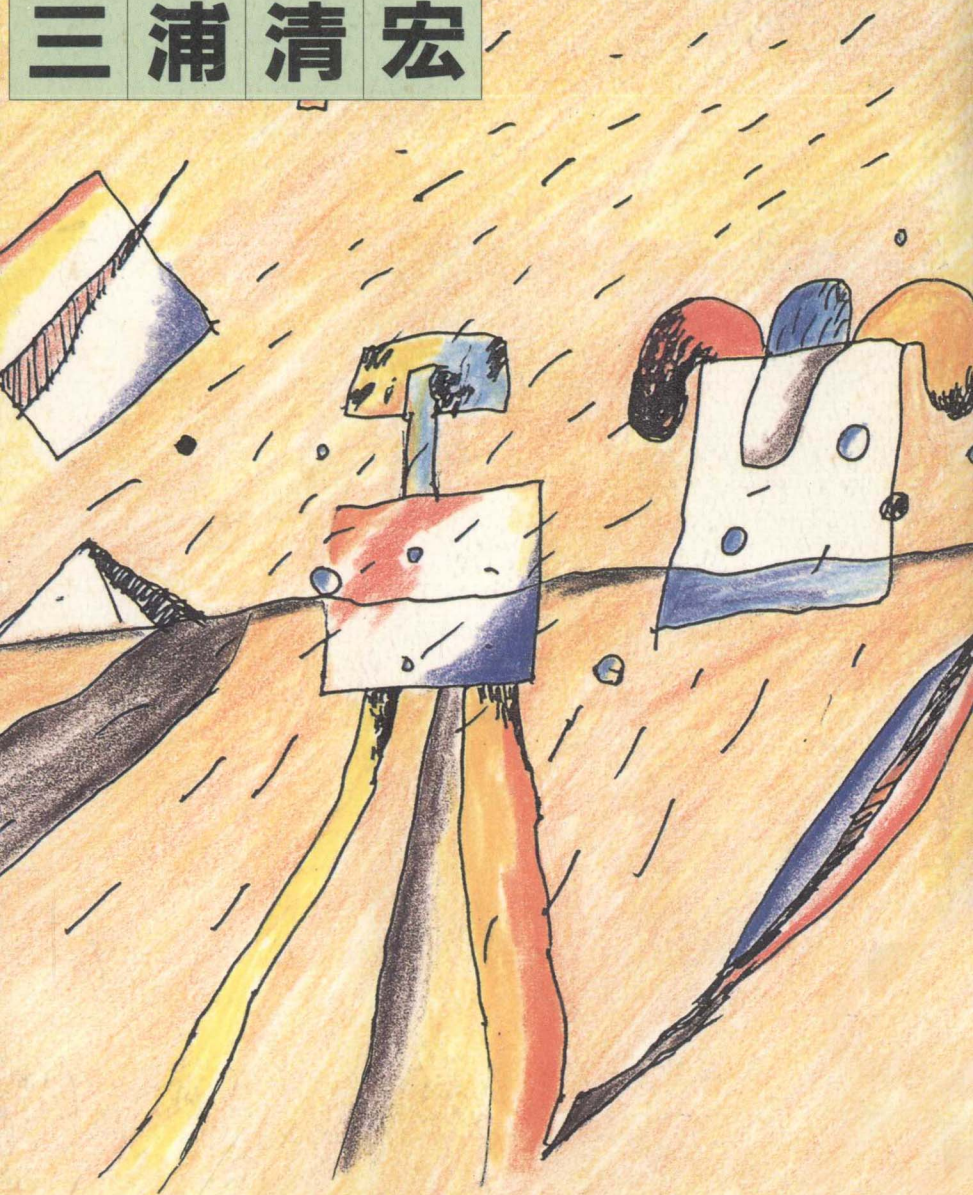


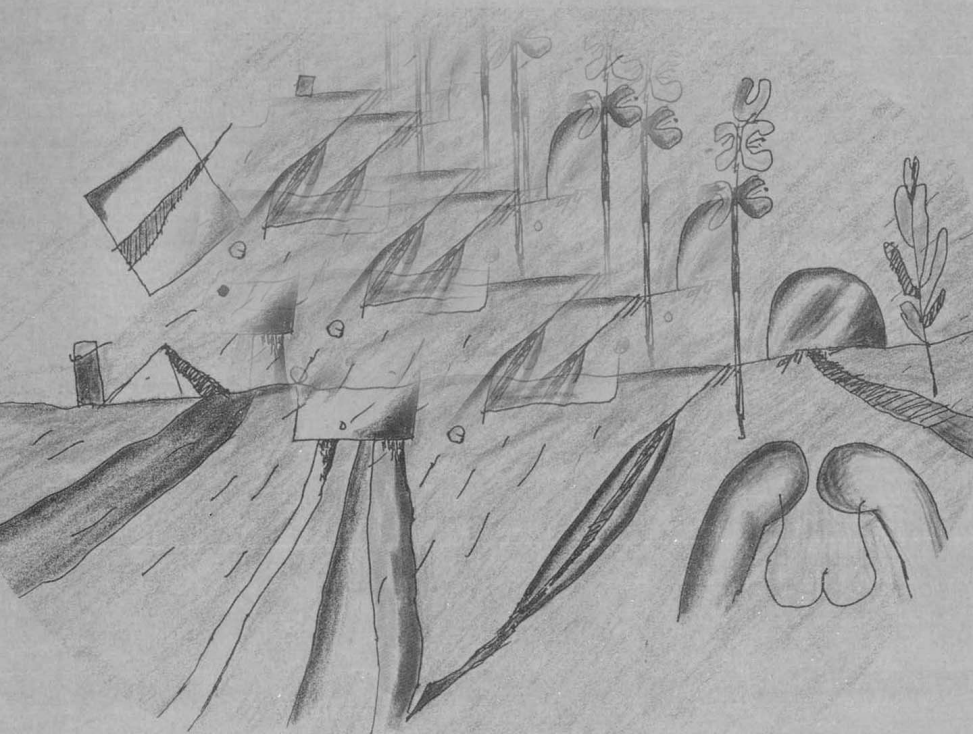
ポエトリ・アメリカ

三浦清宏



ホ エ ト リ ・ ア メ リ カ

三 浦 清 宏



ポエトリ・アメリカ

一九八八年六月一五日 第一刷発行

著者 三浦清宏 みつら しみろ

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―二二二 郵便番号 一〇二―〇一
電話 東京 (〇三) 九四五―一一一 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一一〇〇円

© Mura Kiyohiro 1988. Printed in Japan

著「本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

三浦清宏（みうらきよひろ）
一九三〇年北海道室蘭市生れ。東京
大学入学後中退してアメリカに渡
り、サンノゼ州立大学卒業、アイオ
ワ大学創作科終了。旅行会社勤務等
を経て、現在明治大学工学部教授。
八八年、「長男の出家」で第九八回
芥川賞受賞。

目次

青空のように気高く 5

ポエトリ・アメリカ 55

アメリカン・ブラザー 101

立て、坐れ、めしを食え、寝ろ

141

赤い帆 187

ポ
エ
ト
リ
・
ア
メ
リ
カ

装
幀・竹内
勲

青空のように気高く

「おまえのウチは変ってるな」

と料理を載せた皿を運んでしながら、ビル・ダンが、中国語訛りの強い、爆竹を鳴らし続けるような英語で言った。

「玄関のドアが開いたから、チヨはいるかと聞いたたら、“you wait here.” と言って、ドアをぴしゃりと閉めた。上からじろりと眺め下してな。自分のところのハウスボーイを訪ねてきたって、たいがい内に入れて待たせるものだ。今までおれが行ったところじゃ、みんなリビングルームに入れて、坐って待たしてくれたぜ」

清隆はビル・ダンのベッドに腰を下ろし、居心地の悪い思いで聞いていた。娘ばかり四人もの家族の無秩序な活力に煽られて、影の薄い存在になってしまったような、保証人である教授の背の高い陰気な姿が眼に浮ぶ。

「日曜もまるまる休みがもらえないなんて、ひどい話だぜ」

ビル・ダンがテーブルに置いた魚の料理の上に、フライパンで作った野菜入りのどろりとしたソースをかけながら言った。彼は中国本土から台湾を経由して来た留学生で、中華料理店のコッ

クの手伝いをしている。

「朝の食事の跡片付けをして来たんだろう。仕事は土曜の晩で終りだぜ。おれなら朝自分の部屋から出て行かないがな。チヨはジェントルマンだからな」

ビル・ダンは鼻の先で小さく笑った。

「ハウスボーイだって土曜と日曜休みをもらっている奴をおれは何人か知っている。オーバー・タイムをもらったらどうだ。いったいいくらもらってるんだ、チヨは」

「週に二ドルだ」

清隆は気のすまない調子で言った。

「週に二ドル」

ビル・ダンは無遠慮に笑った。

「それじゃあコーヒーを五六回飲んで、煙草を喫えばおしまいじゃないか」

「煙草はやめたよ」

そう言われると、急に口ざみしくなった。日本で学生寮にいた時、昼と昼の間から吸い殻をほじくり出して喫っていたほどだったが、憧れていたアメリカ煙草がズラリと眼の前に並んだのを見ると、喫わなくても我慢出来たのは不思議だった。

「いいこともあるというわけだな。煙草なんか喫うもんじゃない」

煙草嫌いのビル・ダンは煙を払うように手を振った。

「だが二ドルじゃデートは出来ないじゃないか。煙草は喫わなくても、デートはしなきゃなら

ないだろう。二ドルじゃ映画を一遍見たらおしまいだぜ」

「デートはしないさ」

清隆はビルが中華料理店からくすねて来たらしい箸をとって、魚をつつきながら言った。

「デートをしなかったって、パーティーに行けば女はたくさんいる。パーティーはタダだ」

「その後はタダというわけにはゆかんぞ」

ビル・ダンにはやにやしなからガス・レンジの方に行き、長い箸で鍋の中を掻き廻した。

「女は金がかかる。ことにアメリカの女はな」

清隆は、キャンバス中にあふれ、パーティーを占領し、歩くたびに眼の中に飛び込んできてしかたがない、艶のある白い腕と形のいい弾力のある脚をしたアメリカの女子学生たちを思い出して、いま飲み込もうとした魚の一片が喉につかえた。

ビル・ダンにはアメリカ人のガールフレンドがいる。学校の傍の女子学生ばかり住む大きな家に住んでいて、清隆は、ビルがアルバイト先の中華料理屋でくすねたかもらったかした食物を、彼と一緒に届けに行ったことがある。家の暗い奥から入口の待合室に出て来た彼女の膚は、真珠のように光って見えた。彼女は言葉少なに応待し、ビル・ダンもいつものようにせかせかと、あつてなく別れたが、そのせいもあってか、彼女は人前にあまり姿を見せぬ妖精のように清隆には思えた。キャンバスにはさまざまな女がいるが、気に入った女を見つけることは難しい。まして気に入った女と付き合うこととなったら至難のワザだ。しかしビル・ダンの友達は清隆の眼から見ても、その「至難」の相手の一人に思える。自分にガールフレンドがないから、いつそうそ

う思えるのかもしれないが、しかし、留学生仲間ではあまり相手にされない、それどころか少々軽蔑の気持も込めて「ビル・ダン」と、それが渾名のように呼ばれているこの中国人が、易々とアメリカの女をガールフレンドにしているのが、清隆には不思議だった。

「チヨにはガールフレンドはいないのか。いないことはないだろう。おまえは女に好かれそうだよ。一人ぐらいいるんじゃないか」

そう言われると清隆の胸は熱くなり、悲しくなる。

「ガールフレンドになつてほしいと思う相手はいるよ」

「誰だ、それは」

大きなエプロンをつけたまま椅子に腰を下したビル・ダンは、テーブルに腕を載せて、身をのり出した。

「B教会のパーティーで会った子だ。バーバラ・レムキつて言う。サンタ・ローザから来ているつて言っていた」

「アメリカの女か。アメリカの女はダメだ」

「ビル・ダンは首を振った。

「日本人の女がたくさんいるじゃないか。この町には日本人町もある。どうしてアメリカの女なんか相手にするんだ」

「なにを言うんだ。おまえのガールフレンドだってアメリカ人じゃないか」

「ガールフレンドじゃない。ただ親切にしてやつてただけだ」

「ただ親切にしてやってるだけか」

清隆は考え込んだ。一たん気に入ると彼はどこまでも親切にする。気に入らないと、声をかけても返事もしない。だから変人だと思われている。どういうわけか清隆を気に入って、週末になると誘いに家に訪ねてくる。どうして気に入られているのかわからないが、清隆は彼のぶっきらぼうな態度の中に、ある測り知れない優しさを感じて、驚くことがある。日本人にはない、中国大陸の茫洋とした奥深さを感じさせる優しさだ。

「おれも、ただ親切にしてやる相手が欲しいよ」

「その女は金持か。スーパーマーケットのオーナーの娘とか、テニス・コーチの娘とか……」

「何を言うんだ。そんなこと聞いたこともない。まだ三回しか会ってないんだ。その後、留学生のパーティなんかで会ったが、会うたびに教会に来いと言うんだ」

「それはよした方がいい。そのうち懺悔しろとか入信しろとか言い出すにきまつてる。世界中で一番悪い人間はおまえだっていうことになるよ。そうやって支配しようとするんだ。アメリカの女はズルいからな。おれも前にもう少しでやられそうになったことがある」

その話は清隆は前に聞いた。ビル・ダンがアメリカに來た初めの頃、部屋を借りていた家の高校生の娘だ。ビルはときどき映画に連れて行ってやったりしたが、娘は教会に一緒に行ってくれと何度も頼むので、ビルは下宿を替ってしまった。すると娘が探して訪ねて来て、結婚してくれと言ったと言うのだ。

「教会にだっどどこにだっどおれは行きたいよ。ただ暇が無いんだ。日曜の朝、跡片付けをして

からじゃ遅過ぎる。彼女に二度ほど誘われて、「No, I can't」と言ったときはつらくて情なかった。「Why?」と聞くから「I have to work.」と言ったら、黙っていた。何をしているの、と聞かれるかと思つて、ひやひやしたよ。ハウスボーイをしていると言つたら、付き合っちゃくれないかもしれないからな。しかし付き合い始めてからみじめな思いをするよりは、初めから付き合わない方がいいかもしれない。おれがみじめな思いをするのはいいが、彼女がみじめな思いをしちゃ気の毒だ。そう思うと最初から出かけて行かない方がいいような気がする」

「バカだな。その女とキスでもしたのか。一緒に寝たことでもあるのか。まだデートさえしたこともないのに、何を言つてるんだ。や、スープのことを忘れてた」

ビル・ダン は椅子を倒しそうに立ち上ると、ガス・レンジに駆け寄つた。

「おまえのおかげで焦しちまつたじゃないか。バカなことを言つた罰に焦げたところを食わせるぞ」

ビル・ダン はチキン入りのクリームコーン・スープを、清隆の前の井に木の匙で掻き廻しながら入れた。

「そんなことはみんな、おまえがあの家を出れば解決することだよ。なんで未練がましくがみついているんだ。あそこの家の娘にでも惚れたのか」

「借りがあるんだよ。日本からの船賃三百六十ドルと小遣十ドル、こつちへ来て買ってもらつた洋服代や靴代、それに学校の授業料……」

「そんなのは働いて返しゃいいんだよ。おれだってこつちに来るのに伯母さんから船賃を出して

もらったが、全部働いて返した。ちよつと働けばすぐ返せるよ。おまえを安い賃金で働かせようと思うから、家から出したがらないんだ。おれの知っている男なんか、立派な部屋をもらつて、食べさせてもらつて、月に五十ドルももらっている。そういうハウスボーイもいるんだぜ」

エブロンをとり、ベッドの上にほうり出して、清隆の前に坐つたビル・ダンは、忙しく箸を動かし、丼の飯を掻き込み、魚をつつきながら喋り続けた。自分の料理に手間暇をかけたことなどすっかり忘れてしまったかのようにだった。

「知人の紹介ということもあるんだ」

清隆は弁解がましく言った。

「おれが日本で世話になつたアメリカ人が今の家におれを紹介した。ほんとうはその人達がおれの面倒を見るはずだったが、東部へ転勤したんだ。もしおれがすぐに出たら、そのアメリカ人夫妻は悲しむだろう。おれたち日本人はそういうことを気にするんだ。少々我慢出来ることなら我慢しようと思う。自分が傷つくのに堪えるのは、他人が傷つくのを見て堪えるよりも容易だと思うんだ」

「中国人にはわからんな。自分が痛いのを我慢するというのならわかるが、他人が痛いのを自分が代つて我慢するというのはよくわからん。痛いとしりでも思つたら、痛い、痛い、と叫び出すのが中国流だ」

「でもおれたち日本人は中国人に学んだんだ。じつと辛棒して時節を待つとか、志を高く持つて時流に迎合しないとか……」

清隆は箸を置いて胸のポケットからボールペンを出すと、紙のナプキンの上に、
「燕雀安知鴻鵠之志」

と書いて井の上にかがみ込んでいるビル・ダンの前に出した。

ビル・ダンはこちらと上眼使いで見ると、

“My goodness!”

と坐り直し、そのナプキンを取り上げて眺めた。

「こんな難しい昔の詩を知っている奴はおれの友達にはいないよ」

「詩じゃない。史記か何かに出ている言葉だ」

清隆は当てずっぽうに言った。

「史記。今の中国の若い奴は名前さえ知らないだろうなあ」

清隆はビル・ダンのナプキンをとって、その上に書いた。

「故人西辞黃鶴樓

煙花三月下揚州

孤帆遠影碧空尽

唯見長江天際流」

“Li Po”

とビル・ダンが叫んだ。

「知ってるよ。子供の頃学校で読んだことがある。チヨも学校で習ったのか」